

コンセプト  
&  
ぬり絵



**BIRD-KISSを知ろう！**

**BIRD-KISSがめざす世界**

**BIRD-KISSメソッド**

**BIRD-KISS=同じは、違う。**

**パブリックアートの時代へ**

**BIRDぬり絵の考察001 ~005**



L → O → V → E

**BIRD-KISS to connect  
heart of the world.**

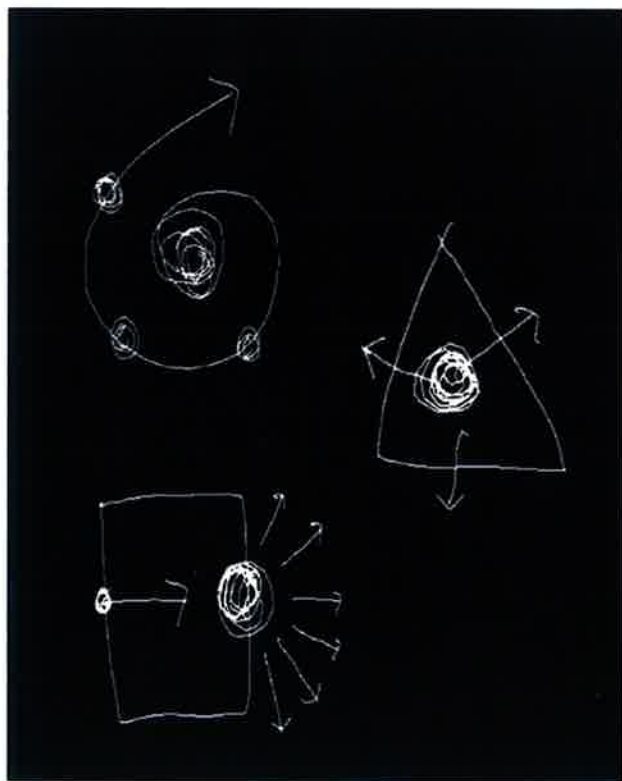
Bird world is an artically with the  
concept. (Love and Trust) to connect  
the world. Kazumi Otake, a Japanese  
artist, is hoping for the happiness of  
children in the 21st century.  
: [www.bird-kiss.com](http://www.bird-kiss.com)  
: <http://twitter.com/birdkiss100>

I N · C O M

# BIRD-KISS

パブリックアートの時代へ

同じ  
は  
違う



# BIRD-KISSがめざす世界

もともと誰もが持って生まれた存在価値を取り戻し、フラットなヒエラルキーのために自分自身をリセットする。そのきっかけづくりとなる試みがBIRD-KISSの役割です。自分を大切にし、自分を愛することが、地球愛へのスタートだと思います。そして自己愛から他者愛へ。さらには、大きなネットワーク（パブリック）となって、地球規模の愛へと広がっていく。

BIRD-KISSは、アートコミュニケーションを用いたメソッドを通してアートからの気づきによる文化的社会の形成をめざしています。アートレスな社会とは、人々が高次の意識と感情を持ち、作品なしでコミュニケーションすること。1人ひとりの人生そのものがパーソナル・ライフ・アートと呼べるような輝きをもった作品に変わっていく。それが運ってゆく社会が、きっと地球を救うことにつながってゆくんだと信じています。

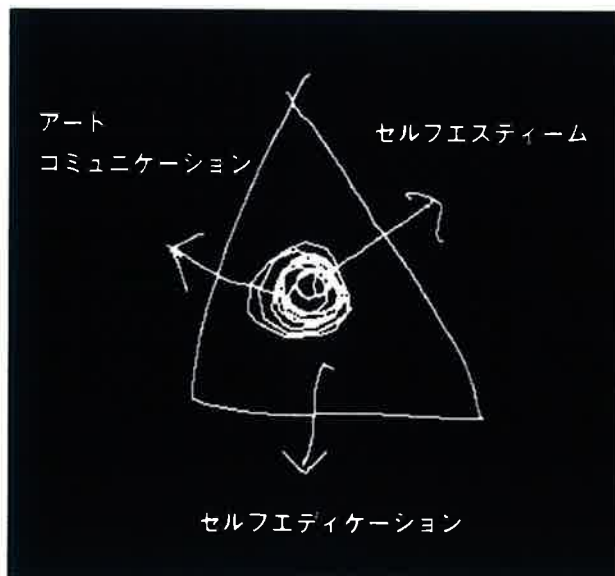


Kazumi Otake

## BIRD-KISSメソッド

アートからの気づきによる文化的社会の形成をめざすために、3つの考え方が大切です。その3つとは、自己肯定感を形成する「セルフエスティーム」、自己発見や自己認知を深めるための自立学習である「セルフエデュケーション」、作品が人々のために役立ち、公的＝パブリックなものへと昇華していく「アートコミュニケーション」。

この3つの軸でアートによる問題解決を図るのがBIRD-KISSメソッドなのです。「ぬり絵」、「貼り絵」、「折り紙」、「らくがき」など、子供の感性で取り組み、自己投影しやすいシンプルな表現を通して、誰もがオリジナリティを大切に、自らの作家性を発揮し、素直な自己表現を可能にする。そんなパーソナルアートの時代を構築するための、BIRD-KISSメソッドです。



## BIRD-KISS=同じは、違う。

一見、魚のようにも見える「鳥」たち。愛娘の一葉（当時6歳）とコンピュータを前にして、電子ペンをタブレットの上で動かして遊んでいるうちに、「鳥」たちはついに、100点を超えてしまった。気づいたら「くちばし」「両目」「足」という3つのアイテムさえあれば「鳥」でいいというルールによって「鳥-BIRD」たちはどんどん鳥らしさから離れて自由な生き物として僕の頭の中に定着した。

振り返ると、それが自分の創作活動にはなくてはならないスタイルが出来上がった瞬間であった。まったくもって一葉のおかげである。一つの共通したフォームをベースに、どこまで自由に羽ばたくことができるのか？そこから自分自身を考えていく。

「同じは違う」という発見からパーソナルアートな時代を考えていきたい。



## パーソナルアートの時代へ

雨が降れば降ったほうがいい。

晴れたら晴れたほうがいい。

あなたがすてきだと思っていることを、

すてきと楽しさのエンジンで回して生きていきましょう。

1人ひとりの自己表現をアートに変えながら、

あなた自身の人生をキャンバスとした

アーティストとして自分の人生を彩っていきませんか。

1人ひとりの人生そのものが、

パーソナル・ライフ・アートと呼べるような

輝きをもった作品に変わっていく。

人生におけるすべての活動を

自己表現の一環として捉えていけるようなセンスを

持っていれば、社会との関わりもアート活動となり、

それが運っていく社会はパーソナル・アーティストの

躍動するアーティスト空間になります。

## フラットなヒエラルキー

BIRDなのに飛べないし。

BIRDなのにクチバシは黄色くないし。

でもね。

飛ぶからBIRDって誰が決めたの？

クチバシが黄色いのがBIRDだって

誰が決めたの？

その誰さんってね。

実はワタシかも。

## アイデンティティーズ

あえて水の中を飛ぶことにしたBIRD。

あえて飛ぶより早く走ることにしたBIRD。

BIRDだから。

BIRDのくせに。

BIRDらしく生きなきゃって。

誰が言ったの？

誰が決めたの？

その誰さんってね。

実はワタシかも。

## セルフエドケーション

葉っぱみたいなBIRD。

金魚みたいなBIRD。

ピアノみたいなBIRD。

みんなの知ってるBIRDだけど

みんなの知らないBIRD。

BIRDがBIRDとKISSすると

新しいBIRDが生まれる。

その新しいBIRDが、きっとワタシ。

ワタシBIRDを見つけてみませんか？

## パーソナル描命 (カクメイ) の時代へ

セルフアートとは、自分じゃないものからの脱出への手がかり。

そしてオープンパブリックへ～

アートがパブリック化し、文化創造社会を形成してゆく。

たった1人のわたしから、たった1人のあなたへ～

個人～家族～市民～地球人までを巻き込んだアートへ～

みんながアーティストになった社会へ～



Kazumi Otake



## BIRDぬり絵の考察001

BIRDを見るのではなく、BIRDの中の自分を見る。

自分の感じたことを色にする行為、加えて、そのワクからもはみでる行為を自然にできる環境づくりから、自分らしさや、既成概念から抜け出る。子どもだけに限らず大人も。家族や社員同士で「なんでその色塗ったのかな」なんて話してほしい。

得体の知れぬモノに色を塗る。だから、どんな色でも構わない。でも、その得体の知れぬモノは、実はBIRD。

最初からBIRDとわかるモノには、それらしい色（既成概念）しか塗らない。それじゃ面白くない。

既成概念をまず取り外すのは、なかなか難しい。それをBIRDのぬり絵をきっかけにできないか？

誰でもできるぬり絵。アートツール。



## BIRDぬり絵の考察002

未就学の子供たちの屈託のない作風そのまま大人になってくれたらといつも思う。

無我夢中で塗って欲しい。

とにかく何も考えず好きなように塗る。

幼い子どもであればあるほど、魅力的なBIRDが生まれる。

色鉛筆も選ばず手に取った色を塗りたいくる子も。何のための輪郭だかわからなくなるほどにぬり込む。人と比べるとか、綺麗に塗るとか考えてない。

人間は皆アーティストとして個性を持って生まれてきたのだと思います。そのまま自由に生きていける社会であれば、もっと豊かな地球が築けたのに。

右倣えの脱個性が作り上げた資本主義社会から、文化主義的社会へ。

誰でもできるぬり絵。アートツール。



## BIRDぬり絵の考察003

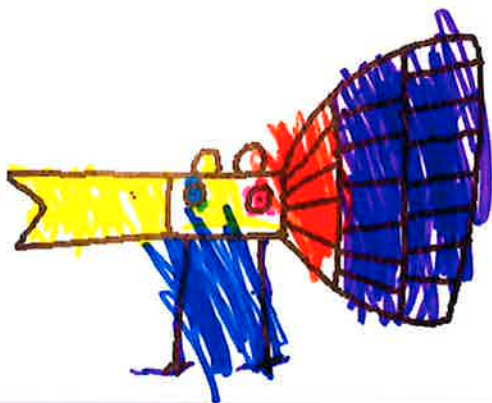
大人も子ども化し、自由を手にする。  
それを見て子どもは大人を信頼する。

- (1) 塗ってみたくなるビジュアル。  
(ひとり→自分発見へ)
- (2) 塗ったものが集まってゆく。  
(仲間→相手発見へ)

そこで気づいてもらうこととは。

- (3) 「同じは違う」というメッセージ  
(ネットワーク→パブリックへ)
- (4) 「みんなのアート力で地球を美しく」  
(みんなアーティストな社会の実現)

ぬり絵のあっち (大人) とこっち (子ども)  
一緒に塗ることの大切さとは？



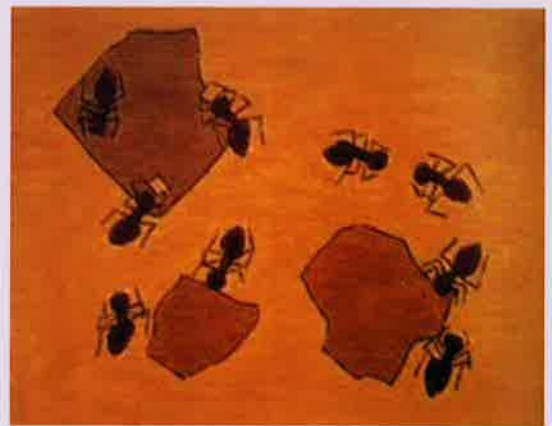
## BIRDぬり絵の考察004

アートは、競争がない。  
自分とBIRDとの同化。  
自分がオブジェになる。

まずはフラットなベースをつくり、アート  
なコミュニケーションでメッセージしてゆ  
く。課題を解決してゆく。会話してゆく。  
あまり難しく考えないで、自分らしさを見  
つめるきっかけとしてのBIRD-KISSメ  
ソッド。

いつでもどこでも体験できるBIRD-WSを  
日々提案していく。

30年間、自宅の森 (庭) から出たことのない画家の熊谷守一は、アリの絵も多く描いている。94才の夏の1日を描いた映画「モリがいる場所」の中で、彼は、1匹1匹性質があるというとおかしいけれども、気風が違うんですわ」と語ってる。



熊谷守一「赤蟻」



## BIRDぬり絵の考察005 (FMラジオ局の収録から)

僕の作品を使って、ぬり絵という手法で子どもたちのコラボレーションを楽しむというワークショップをやっ  
てましてぬり絵で世界の子どもたちを元気にしようという活動してます。

僕の作品は、空想の鳥「BIRD」というのですが、ラジオなので、直接作品を見ていただけないのがもどかし  
いのですが、まあ、一言で言うと、鳥なんだけど、「へんないきもの」とよく子どもたちに言われます。

簡単にいうと、くちばしととり足をつけたらBIRDよろしく！という作品です。そのBIRDの輪郭線に、子ども  
たちが色鉛筆やサインペンで色をぬるということなんですが、出来上がった時に、ぼくのオリジナル作品と子  
どもがぬった作品を並べて聞くんですよ。どっちがいいか？って。

そうすると、一瞬で自分のBIRDの方がぜったいいいと。ぜったいですよ。(笑) なんか？と聞くと「おじ  
さんのBIRDは色が単調」だから。ははは。完全にオリジナルを食っちゃってますよね。アーティストとして立  
場ないです。

でも子どもたちには、ぼくの作品を通してなんか自分らしさみたいなことに少しでも気づいてくれたらいいな  
と。それが感じられた時がとて嬉しいですよ！

ぬり絵を見てもホント面白いですよ。まあ、好きに塗るだけのことなのですが、子供によってぬり方が実に多様。

- (1) ワクからはみ出ないように慎重にぬる子。→まあまあ世の中の良い子。
- (2) 用意した色鉛筆を全部つかってぬる子。→自由に塗って楽しむ子。
- (3) 羽を足したり、目だまにアイシャドウしたりして自分なりにカスタマイズする子。→独自性が芽生えた子。
- (4) たくちばしから火を吹いたり、足をたしたり。自分なりにストーリーを考えながらぬってる子。→創造性ある子。

でもやっぱり天才だと思うには、未就学のこどもです。

- (5) ワクからはみだして、ぬりたくる子。
- (6) BIRDの輪郭線自体もみえなくなり、もともとなんだったかわからなくなっても、ぬり続ける子。最高です！  
みてて、ソクソク、ドキドキしちゃいます！！まいったなと！！

なぜかという、「人と比べる」という意識がないからじゃないかと思えます。

小学校とかに入って、どんどん「絵」が嫌いになる子というのは、「園工」の時間に、なんか「うまい」「へた」の基準  
みたいなものを教えられる(感じちゃう)からというものあるんじゃないでしょうか？

だから、こんな風にぬったら、友達にどう思われるんだろうとか考えちゃう。自分の好きなようにぬって、とても勇気  
のいることじゃないでしょうか？

その点、僕のBIRDは、もともと「へんないきもの」だから、どんな色でどんなぬり方しても既存の形状に左右されない  
のもいいんです。



Kazumi Otake



## BIRDぬり絵の考察006 (FMラジオ局の収録から)

以前、小学校低学年むけに親子ワークショップをしたときのエピソードですが、くちばしを緑で塗ろうとしていた子供にお母さんが、「ほらほらくちばしは黄色でしょ」と耳打ちしてるんですよ。そしたら、その子が、「でもBIRDおじさんの絵は、赤だったり紫だったりするよ」って。僕にとっては、ワークショップ冥利につける瞬間ですね。(いいぞいいぞってね) だから、お子さんが、どんな色を塗っても褒めてあげてください。その子の個性ですから。太陽は赤くなくてもいい。空は青くなくてもいい。草原は、緑じゃなくてもいいんです。

僕はこう思うんです。

「人間は生まれてきた時からみんなアーティストで、みんな素晴らしい個性をもって生まれてきた。だから、その個性をおもいきり伸ばせる社会、そして、その個性を認め合う社会ができればいいなと」そんなことを考えるきっかけとしてこのBIRDワークショップを広めています。ご興味あるかたは、ホームページをご覧ください。英語のスペルで、BIRD-KISSまたは、ひらがなでおおたけかずみで検索していただければと思います。

BIRDワークショップでは、その場で塗っていただくコーナーもありますが、お持ち帰り BIRDぬり絵カードというものがあります。後日 自宅などで塗ってもらったBIRDをホームページ内のBIRDウェブ美術館に投稿してもらうのですが、それが、携帯に、自動で飛んでくるんですよ。だから毎日のように投稿されてくるBIRDぬり絵との「出会い」が僕のすごいエネルギーになってます。日常的にBIRDとの「出会い」があるなんて、素敵でしょ。

100羽のBIRD作品が展示してある「BIRD美術館」が2箇所ありますが、そこではいつ来ていただいても、体験いただける常設のBIRDワークショップを行っています。一つは那須高原の那須オオシマフォーラム内の「BIRDステーション」という施設です。もうひとつは、茨城の小美玉市にある四季文化館「みの〜れ」です。年間の各種イベントとのコラボで、オリジナルなBIRDワークショップをしています。他にも高校生やこども食堂などのタイアップでワークショップも行なってます。最近では、モンゴルやカンボジア、ミャンマーの現地の子供たちにも参加してもらいました。



Kazumi Otake